

水産衛生対策（海面）

堅田昌英（増養殖部）

1 目的

養殖魚介類の防疫指導を適切に行うことで疾病のまん延防止を図り、安心・安全な生産・供給体制を確立する。

2 方法

1) 養殖漁場の巡回指導

県内を中部（田辺湾）、南部（串本浅海漁場・大島養殖漁場・須江養殖漁場）および東部（浦神湾）の3海域に分け、毎月1回ずつ防疫パトロールを実施した。

2) 魚病検査および健康診断

巡回指導の際のサンプリングや水産試験場へ持込のあった検体に対して魚病検査および健康診断を実施し、魚病対策指導を行った。魚病検査および健康診断は、外観症状や解剖による内臓の病変を観察した後、常法に従ってウイルス、細菌および寄生虫の検査を実施し、分離された細菌は抗血清による簡易同定を行った。なお、マダイイリドウイルス病はギムザ染色法、ウイルス性神経壊死症およびウイルス性出血性敗血症はRT-PCR法、アワビ類のキセノハリオチス症およびヒラメのクドア症（粘液胞子虫 *Kudoa septempunctata* による感染症）はPCR法、粘液胞子虫性やせ病はディフ・クイック染色法およびPCR法により検査を行った。

3) 水産用医薬品残留検査

マダイ養殖における水産用医薬品適正使用指導に資するため、平成26年7月4日に田辺湾、7月7日に串本浅海漁場から養殖マダイを5尾ずつサンプリングし、筋肉中の塩酸オキシテトラサイクリンの残留検査を行った。なお、サンプリングした田辺湾の養殖マダイは1歳魚で、平均魚体重は0.8kg、串本浅海漁場は2歳魚で、平均魚体重は1.6kgであった。

3 結果及び考察

1) 養殖漁場の巡回指導

養殖業者に対して、魚病対策指導および水産用医薬品適正使用指導を実施し、魚病検査および健康診断に供するために養殖魚のサンプリングを行った。

2) 魚病検査および健康診断

①魚病検査

平成26年度魚種別・月別魚病検査件数を付表1に示す。全体で検査件数は12魚種124件であった。

魚種別ではマダイが49件で最も多く、次いでクロマグロが31件、トラフグが22件で、これら3魚種で全体の約82.3%を占めていた。月別に見ると7～10月の高水温期に多く、1ヶ月当たり13～24件の検査を行った。

②魚種別魚病発生状況

ブリでは、9月にマダイイリドウイルス病が1件発生し、カンパチでは4月にゼウクサブタ症、9月にマダイイリドウイルス病とゼウクサブタ症の合併症および血管内吸虫症が1件ずつ見られた。

マダイでは、ウイルス性神経壊死症が5月および6月に1件ずつ発生した他、マダイイリドウイルス病が8～11月にかけて単独および寄生虫病との合併症で10件見られた。細菌病は単独および寄生虫病との合併症で22件発生し、その内訳は、エドワジエラ症11件、滑走細菌症5件およびエピテリオシスチス症6件であった。寄生虫病は単独および合併症を合計すると発生件数32件で、やせ病原因粘液胞子虫、ビバギナ、ラメロディスカスおよび海産白点虫の寄生が見られた。

イサキでは、ウイルス性神経壊死症が5月および7月に1件ずつ発生した他、マダイイリドウイルス病が7～9月および11月に単独および海産白点病との合併症で5件見られた。寄生虫病は海産白点病が7～9月および11～12月に単独および合併症で1件ずつ発生した。

シマアジでは、ネオベネデニア症が9月に1件発生し、クエではウイルス性神経壊死症が7月に1件見られた。

クロマグロでは、血管内吸虫症が6～翌年1月にかけて21件発生した他、骨折による死亡が単独および血管内吸虫症との併発で5～12月にかけて22件見られた。また、スマでは10月に環境障害（泥を含む海水に起因する

呼吸不全)による死亡が1件発生した。

トラフグでは、口白症がシュードカリグス症との合併症で6月に1件発生した。細菌病はビブリオ病がヘテロボツリウム症およびシュードカリグス症との合併症で6月に1件見られた。寄生虫病は粘液胞子虫性やせ病が単独および他の寄生虫病(ヘテロボツリウム症, シュードカリグス症および海産白点病)との合併症で6~翌年3月にかけて18件発生した。また, 9月にシュードカリグス症とヘテロボツリウム症の合併症, 11月に海産白点病とトリコジナ症との合併症が1件ずつ見られた。

ヒラメでは, ウイルス性出血性敗血症がビブリオ病および海産白点病との合併症で5月に1件発生した他, 同じく5月にビブリオ病と滑走細菌症の合併症が1件見られた。

オニオコゼでは, 9月にビブリオ病と滑走細菌症の合併症が1件発生した。

クロアワビでは, 8月にビブリオ病が1件発生し, 中間育成中の稚貝に多くの死亡が見られた。

③健康診断

平成26年度魚種別・月別健康診断件数を付表2に示す。全体で診断件数は15魚種82件であった。このうち, 水産用ワクチン接種前の健康診断は6魚種7件であった。

魚種別に見ると, マダイが中間魚, 稚魚および受精卵(種苗生産開始前のウイルス性神経壊死症原因ウイルス検査)を合わせて30件で最も多く, 全体の約36.6%を占めていた。次いでクエおよびトラフグが10件ずつであり, 他の魚種は4件以下であった。

マダイ中間魚では, エピテリオシスチスが確認された他, カリグス, ビバギナおよびラメロディスカスの寄生が見られ, 稚魚ではカリグス寄生を除いて中間魚と同様の傾向であった。

クエでは, 稚魚において出荷前のウイルス性神経壊死症の検査を行ったが, 原因ウイルスは検出されなかった。

トラフグ中間魚では, シュードカリグスとトリコジナの寄生が見られ, 稚魚ではこれらに加えてヘテロボツリウムの寄生が認められた。

ヒラメでは, 稚魚において出荷前のクダア症の検査を行ったが, 原因粘液胞子虫は検出されなかった。

アワビ類(クロアワビ, メガイアワビおよびトコブシ)では, 採卵・採精前の親貝糞便および出荷前の稚貝について, キセノハリオチス症の検査を実施したが, 原因細菌は検出されなかった。

3) 水産用医薬品残留検査

いずれの検体からも塩酸オキシテトラサイクリンは検出されなかった。